

中学3年次に「学習支援」を受けた高校生への支援のあり方について —「八千代市・若者ゼミナール」在籍高校生へのインタビューを通して—

プロジェクト1 客員研究員
植草学園大学発達教育学部 准教授
宮下 裕一

1. はじめに

本稿は、主として中学在学中に学習支援を受けた子どもたちを対象に、高校在学中の支援のあり方を検討するために行ったインタビューの内容を検討しようとするものである。

今年度「社会的な居場所づくり支援事業」の一環として生活保護受給世帯の子どもへの学習支援が開始され、厚労省は来年度から全国にその補助を拡大予定である。

中学生に対する学習支援自体は新しいものではなく、たとえば東京都江戸川区で開かれている「江戸川中3勉強会」は20年以上の歴史を有している。このような中学3年生に対する高校受験を突破するための学習支援はとても重要である。だがこの学習支援を受け高校に入学することが出来た子どもたちはその後どうなっているのだろうか。

この点について、高校生になった子どもたちが中学生への学習支援にかかわるようになるなどの実践例もいくつか見られる。また高校入学後も継続して学習を行っているという例もある。だが、高校入学後様々な理由で中退してしまう子どもたちがいる現状から、「中退予防」あるいは「中退後の支援」も見られるようになっている。¹⁾

ここでは、高校生支援のありかたを検討するために、千葉県八千代市における、主として中学生を対象とした「学習支援事業」である「八千代市・若者ゼミナール」

に在籍し、高校入学後も継続的に参加している高校生に対してインタビューを行い、彼らの語られた思いを元に、将来、社会的に自立していくために当事者が求めている、あるいは必要とされるものとは何か、について焦点をあてていくことにする。

2. 調査の方法

現在若者ゼミナールに継続的に参加している高校生（研究参加者）を対象に、本インタビューへの協力依頼文書を保護者あてに、八千代市生活支援課を通して送付した。協力の得られた高校生は1年生が2名、2年生が1名の計3名である。その高校生に対して、1. 中学3年次の勉強会について、2. 中学時から現在までに、勉強以外に経験したかったこと、3. 高校卒業後の進路に向けて経験したいこと、を中心に、自由に語ってもらう半構造的インタビューとした。

インタビューの時間は一人約30分とし、インタビューの内容については、依頼文書およびインタビュー前の説明後の同意を得て録音し、逐語録を作成した。

3. 分析方法

まず、事例ごとに逐語録の内容を確認し、調査項目を中心にしつつも逐語録の意味内容の類似性にもとづき分類整理した。

その結果、主に1. 若者ゼミナール参加当初の状況、2. 中学3年次の学習、3. 高校生として参加し続けること、4. 高校生への支援のあり方、5. 若者ゼミナールへの提案、についての内容を得ることが出来た。その内容を元に、それぞれの発言の共通性や独自性、また文脈上のつながりを検討した。

4. 倫理的配慮

インタビュー調査を行うにあたり、高校生及びその保護者に対し、書面にてインタビューの趣旨について説明し、「同意書」への署名をそれぞれから得ている。またインタビュー実施にあたり、再度、インタビューの目的、方法、守秘性の確保、本インタビューへの協力は強制ではなく自由意志によるものであることを口頭で説明し、同意を得ている。

5. 結果

インタビューにて産出されたデータを、「分析方法」に示した5つに分類し、以下、その内容の整理を試みる。

(1) 若者ゼミナール参加当初の状況

今回、インタビューに協力してくれた高校生3名が若者ゼミナールに参加し始めた時期は異なっている。1名は中学2年次から、他の2名は中学3年の後半から参加し

始めている。参加にあたっての不安は、3名ともにほとんど感じていなかったようである。

また参加し始めた頃については、自宅では勉強する環境が整っておらず勉強に集中できないため学べる場所を求めている、学校のように一人の教員に対し多くの生徒が学ぶという形式ではなく少人数で学べればと思っていた、親からの勧めもあり参加し始めた、などという状況であった。

すでに参加していた生徒の勉強している姿を見ながら、初めて受験を意識し、勉強しなくてはならないという自覚が芽生えたり、学校とは異なりまず自分で問題に取り組むが、わからないときに個別に対応してもらうことにより、勉強がはかどった、という発言もあった。

(2) 中学3年次の学習について

若者ゼミナールでの時間は、本人の主体的な学習への取り組みが期待されている。そのため、基本的には生徒自身がその日の学習内容について考えていくことになる。その日の勉強の進め方について、必要に応じて支援者からのアドバイスが得られ、また相談に乗ってもらえるという場であることに対し、生徒は肯定的に捉えている。また、同じ問題を支援者や同級生とともに悩みながら取り組むという学びの形態を楽しく感じていた。

だが、勉強をするといっても好きな教科だけをやるのではなく、高校受験に備えての勉強になる。そのため苦手な教科にも取り組む必要がある。本人にとってはやる気が起きない時ではあるが、支援者からの励ましにより勉強が出来た、わからないことがわかるようになったという発言もあった。

若者ゼミナールへの参加によって自覚的に受験勉強を始め、学校での勉強への姿勢が明らかに変わり、担任にも驚かれるくらいの変化を自覚した生徒もいた。

一方、支援者側にも得手不得手の教科がある。そのため、生徒からの手助けを求められた場合、共に取り

組むという方法も用いているが、その教科に詳しい支援者に一時的に対応を代わってもらうこともある。この点は、結果的により多くの支援者とのかかわりがあり、若者ゼミナール内での人の輪の広がりを実感させ、またそれが社会に出る際の社交性の獲得と関連させながら当時を振り返る発言もみられた。

参加している生徒は複数の学校から集まっている。若者ゼミナールへの参加を通して、他校の生徒とのつながりや交流も見られた。だが一方で、同年代の生徒、特に異性の場合、話しづらいという発言もあった。

支援者側には大学生も含まれている。年齢的に近い高校生にとっては、関わりやすいと感じているようである。「優しく接してくれる」という表現もみられた。

(3) 高校生として若者ゼミナールに参加するということ

現在のところ、中学受験を終えた子どもたちに対して、日常的に何らかのメニュー（支援）を継続的に行っているわけではない。にもかかわらず、特定の高校生が継続的に若者ゼミナールに参加している。その理由を尋ねてみると、ただ単に時間が空いているという理由を挙げていたり、自宅ではまったく勉強をしないため、勉強できる場所で勉強がしたい、後輩や親しくなった大学生と会いたい、高校では赤点を取ることに伴う退学の可能性があり、そのことを意識し勉強をしに来る、などの発言が得られた。

それ以外としては、特定のメニューがあるわけではないが、勉強時間終了後から帰宅を促されるまでのわずかな時間を使っての、若者ゼミナールを通して知り合った同級生や下級生、ボランティア等との「雑談」の時間を楽しみにしている姿も語られている。また学校とは違い、人との交流を大事にしている場所と感じ、楽しく勉強が出来るという発言もあった。

また高校生となり、場合によっては中学生の相手をする機会もあったり、大学生からアルバイトやその面接の話の聞いたりするなかで、高校卒業後の職場での

対人関係と職業としての「接客」をイメージし、人間関係の形成と広がりを実感している趣旨の発言もみられた。

(4) 高校生への支援のあり方について

現時点では、直接高校生に自分たちへの支援の具体的な中身を尋ねたとしても返答が難しいのではないかと考えた。そのため、継続的な取り組みとはなっていないが、以前より若者ゼミナールでは「学習支援」のみならず、「仕事」に関する情報提供や、市の保健センターの協力による調理と口腔衛生に関する講座、また「職業体験」と称して農家での農業体験等、将来の職業や生活力を念頭に置いた支援を行ってきていることから、それらを自らの進路と関連付けながら高校生支援について尋ねることとした。²⁾

職業体験については、高校卒業後の自らの職業を念頭に置き、そこで実際に仕事をしている人からの話が聞きたいという、体験の機会の提案があった。また農業体験に参加した高校生からは、日常的に食しているものの流通ルート的一端を若者ゼミナールの支援者とともに実感でき、また楽しめたとの発言が得られた。

若者ゼミナールには大学生が継続的に関わっている。そのためか、将来の進路に関連して、大学生からいろいろと話を聞きたいという声が共通して得られている。

保健センターの協力による企画についても、将来の自活をイメージしながらの体験ができたようである。

(5) 若者ゼミナールの運営方法に関する提案

子どもたちの学習スタイルは人それぞれ異なっている。1対1の対応を好んだり、複数の子どもと一緒に勉強することを好む場合もある。そのため、可能な限り一人ひとりの学習スタイルに合った対応をしてもらえば楽しく学べ、次回も来たいと思えるのではという指摘があった。

また、昨年度は中学3年生が多く在籍していたこともあり、支援者数の関係から年が明けてからは3年生に集中的に対応せざるを得ない状況があった。その点については止むを得ないとしながらも、お互いに教えあうという関係を求め、同じテーブルで異学年の生徒同士で勉強したかったという声もあった。

さらに支援者による生徒への働きかけ方であるが、今は勉強する気分でなく休憩していると考えている生徒への支援者からの関わりに対しわずらわしさを感じることがあるため、その点についての配慮を求める声や、人数の割に学習する場が狭いという指摘もあった。

中学時に、勉強以外に経験できたらよかったと考えることについては、特に指摘はなかった。

6. 考察

(1) 若者ゼミナル参加への働きかけについて

前述したが、高校生3名は若者ゼミナル参加にあたり特に抵抗は感じていなかった。この点と関連して、インタビューでは普段の暮らしの中での親戚や近隣の人とのかかわりを尋ねている。そのうち2名は日常的に親族や親を通じて、あるいは近隣に住む子どもから大人までの異年齢の人たちとのかかわりを持っていた。

若者ゼミナルでは、市の家庭・就学支援相談員や大学生を含むボランティアなど、多様な年齢層の人々が子どもたちを受け止めている。若者ゼミナル参加にあたって出会うであろう人たちへの不安を訴えてはいなかったこの2名に関しては、今までの人との繋がりが少なからず関係していたように思われる。

児童扶養手当受給世帯の子どもと比較して、生活保護受給世帯の子どもたちの社会生活・経験の少なさの指摘もされている。³⁾ そのため新規に若者ゼミナル参加の働きかけを行う際には、それほど人を意識せずに

勉強が出来るという環境、あるいは選択肢を示すなど、今までの人間関係の「狭い」子どもたちをも念頭に置いたかかわりも必要ではないかと思われる。

(2) 高校生として参加し続けることの意義

「職業体験」については、今までの参加の有無に関わらず3名がみな興味を示していた。それへの参加を通して進路に関する示唆を得たい、また実際にその職業に従事している人とのやり取りや職業活動参加を通して何らかの学びを得たいという姿勢も示されていた。以上のことから、高校生からの意見に耳を傾けかつ協働し職業体験の企画立案、実施することが、たとえ実施形態が不定期だとしても、有効性があるのではと考えられる。

同時に支援者として関わっている大学生との交流を楽しみにし、また自分の近い将来のひとつのモデルとして情報を得たい旨の発言もあった。このような要望を丁寧を受け止めつつ対応していくことが、高校生へのプラスアルファの支援につながるのではないだろうか。

以上のことから、若者ゼミナルは学習支援の場であるとともに、多様な職業体験および人間関係形成・拡大の機会を提供する場であるとも考えられる。

(3) 自らの困難を発信でき、かつ受け止めてもらえる場

現在若者ゼミナルは市の事業として運営されており、非常勤職ではあるが1名の家庭・就学支援相談員が中心となり、子どもたちの受け入れを担っている。

今回のインタビューについての協力依頼をしたのは、中学卒業後ある程度継続的に若者ゼミナルへ参加している高校生であった。一方で継続的な参加はしていないが、何か困ったことが生じたり、相談したいことがある時に若者ゼミナルに顔を出す子どもたちもいる。その際、家庭・就学支援相談員は、子どもたちの

家庭と若者ゼミナールを結ぶ重要な役割を果たしている。

若者ゼミナールは週1回開かれている。だが子どもたちの困りごと・悩みごとは時間を問わずに生じる。何かあった際に家庭・就学支援相談員に相談し、また中学3年次に勉強を通して慣れ親しんだ大学生やかつての同級生に話を聞いてもらっている場面もあった。

このように、若者ゼミナールは気持ちが行き詰った時に頼れる、あるいは「思いを吐き出せる」場であり、また思いを受け止めてくれる人がいる場でもある。

7. 本稿の限界と今後の課題

本稿では、中学受験を終え、高校入学後の高校生に対する支援のあり方を検討するために高校生へのインタビューを実施したが、協力の得られた3名からのデータの整理を試みたものであるという制限がある。加えて、前述したが、中学受験を終え普段はそれぞれの生活を営んでいるが、何か困ったことに直面した時に、若者ゼミナールへ足を運ぶ子どもたちの、中学3年次に過ごした若者ゼミナールへの思いと現在の心境を語ってもらうまでには至っていない。可能であれば改めてこれらの高校生からの協力を得てインタビューを行い、その内容の検討が必要であると考えている。

謝辞

本インタビューの実施に際し、ご協力いただいた皆様に感謝いたします。

本インタビューは、八千代市健康福祉部の許可を得て実施したものです。重ねて感謝申し上げます。

注)

- 1) 「学習支援の成果、多方面に」毎日新聞、2010.12.1
- 2) 八千代市若者ゼミナールにおける活動報告については、宮下裕一（2011）「八千代市若者ゼミナール」の取り組みと課題」『八千代市母子世帯の子育て調査報告書』東洋大学福祉社会開発研究センター．を参照のこと。
- 3) 森田明美・清水冬樹（2009）「低所得母子世帯の生活実態から見る社会福祉課題の検討」『福祉社会開発研究』、93-104.